

第3学年 国語科 学習指導案 単元名 「古典に学ぶ おくのほそ道」 ふるさとさくぎ句集への道	日 時 令和6年11月14日（木）第6校時 学 年 第3学年 4名（男子3名 女子1名） 指導者 榊井 紗恵
--	---

1 単元について

(1)単元観

本単元は、〔知識及び技能〕の（3）伝統的な言語文化に関する事項の「ア 歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむこと。」、〔思考力・判断力・表現力〕C読むことの「エ 文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見をもつこと。」および「イ 文章に表れているものの見方や考え方について考えること。」を受けて設定している。

本単元で扱う『おくのほそ道』は、江戸時代初期の俳人松尾芭蕉によって書かれた紀行文であり、日本古典の名作である。江戸を出発し、奥州・北陸をまわり大垣に至るまでの150日間、実に2400kmの旅の記録であるが、作者の旅に向ける思いと、旅先での思いとがつながり、訪れた土地での歴史をふまえた深い洞察と鋭い感覚とが、推敲に推敲を重ねた簡潔な漢文調で格調の高い文章で記されている。ここでは、冒頭部（「月日は」）と、「平泉」「立石寺」を扱う。冒頭部は、芭蕉の人生観、旅への思いや出発の強い決意などが書かれている。「平泉」の部分は、芭蕉が目にした奥州藤原三代の廃墟の様子を描き、杜甫の「春望」をふまえて、「人間の営みのはかなさ」、「昔をとどめることのない変化」への感慨と、これと同内容の俳句が置かれている。後半は、「変わらずに残っているもの」として中尊寺金堂への感慨が描かれている。「立石寺」は、立石寺の説明や芭蕉が見聞きした様子とその感想が述べられ、その情景と心象とをみごとに「一体化」させ句を詠んでいる。

『おくのほそ道』は紀行文とはいっても、俳句を織り交ぜた俳文の要素をもち、文章と俳句が見事にとけあった深みのある表現を味わうことができる。歴史的背景に注意しながら、芭蕉の生き方やものの見方、考え方について読み取り、人生や自然に対する自分の意見をもたせることのできる単元である。

(2)生徒観

本学級の生徒は、これまでに物語や詩を味わい、「俳句の可能性」ではその基礎知識も学んできた。長文の内容を読み取ることが苦手だったり、考えをまとめるのに時間がかかったりする生徒もあるが、試行錯誤しながらも課題に意欲的に取り組んでいる。他の考えを聞きながら、よいところを取り入れようとする姿勢も見られる。学力に差があり、課題の自己解決において支援を要する生徒もいる。令和6（2024）年4月に実施された「全国学力調査」では、「知識・技能」「思考・判断・表現」において全国58.1％を6.9上回り、65％の通過率となっている。ただ、「読むこと」に関しては全国比10.4ポイントと低く、37.5％となっている。自分の考えを記述できたり発表できたりしても、それが全くの想像であったり、本文の内容と同体験をした自分の過去の出来事からの発言であったりする。感情移入したり共感したりできることは大いに喜ばしいが、本文の内容に沿って、必要な情報を取り出したうえで課題に答えることに課題が残る。

(3)指導観

本単元においては、歴史的背景に注意しながら、芭蕉の生き方やものの見方、考え方について読み取り、人生や自然に対する自分の意見をもたせたい。その言語活動として、「ふるさとさくぎの句集」を作る。「おくのほそ道」のように俳句と地の文章とを関連づけて書き、これまで体験学習で培ってきたふるさと作木の自然や人の営みなどを俳句に表現する。そのために、「平泉」の場面では、文章や俳句から芭蕉が見たもの感じたものを読み取らせ、昔の栄華をとどめていない高館の場面と、当時を偲ばせる光堂の場面との対比をとらえながら、人間の営みのはかなさといった、芭蕉のものの見方や考え方の根底にある無常観にもふれる。歴史的背景を知らない生徒にとっては、「平泉」で涙を流す芭蕉の心情を読み取ることは難しい。そこで、現代語訳や脚注に着目させるだけでなく、資料集を活用させたり「義経記」を紹介したりすることで理解を深めさせたい。そのうえで、「人と自然の対比」、「自然の偉大さ」、「人間の営みのはかなさ」、「悠久の自然にも対峙できる先人の偉大さ」、「自然との一体感」などの観点をまとめていき、俳句作成につなげたい。加えて、リズムの良さでも評価され

ている作品であるので、これまでの古文の学習同様、繰り返し声に出して読み、そのリズムも味わうという学習も念頭に置く。その過程で、基礎的な知識の一つである歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して音読する力の定着も図る。

2 単元の目標

- 歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむことができる。
〔知識及び技能〕（3）伝統的な言語文化に関する事項のア
- 文章に表れているものの見方や考え方について考えることができる。
〔思考力・判断力・表現力〕 C読むことイ
- 文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見をもつことができる。
〔思考力・判断力・表現力〕 C読むことエ
- 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書をととして自己を向上させ、我が国の言語文化にかかわり、思いや考えを伝え合おうとする。〔学びに向かう力、人間性等〕

＜単元の評価規準＞

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しんでいる。	①文章に表れているものの見方や考え方について考えることができる。（C読むことイ） ②文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見をもっている。（C読むことエ）	①粘り強く文章に表れている芭蕉のものの見方や考え方について考えることができる。 ②学習の見通しをもって文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の考えを句集にまとめようとしている。

3 単元計画 全9時間（本時4時間目）

（1）指導と評価の計画

時	学 習 内 容	評 価				
		知	思	主	評価規準	評価方法
1	課題の設定 ・句集を作るという学習の見通しをもつ。 ・旅の目的など、「おくのほそ道」と松尾芭蕉について基礎知識をもつ。 ・本文以外の句を先に鑑賞し、意見を伝え合う。				・歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむことができる。 ・これまでの体験学習、行事を振り返り、芭蕉や「おくのほそ道」の概要を知り、学習に対する関心を持っている。	観察
2 3	情報の収集 整理・分析 ・冒頭部「月日は（旅立ち）」の文章や俳句から、芭蕉の旅に対する考えと出発への決意をとらえる。 ・繰り返し音読し、漢文調の文体に読み慣れる。 ・「月日は」の俳句の観点をまとめる。 ・「平泉」の予習「義経記」紹介	◎			・現代語訳や脚注を活用して歴史的背景に注意して読み、俳句にも表れている芭蕉の旅や人生についての思いを読み取っている。	観察 記述 発言
4 本 時 5	情報の収集 整理・分析 ・歴史的背景に注意して、芭蕉のものの見方や考え方を捉える。 ・「平泉」で芭蕉が見たもの感じたもの、奥州藤原三代の栄華と滅亡、「義経記」と「春		◎		・進んで文章・俳句から芭蕉の見たもの感じたもの考え方などを読み取り考えようとしている。〔思判表〕 Cイ	観察 記述 発言

6	望」などをもとに芭蕉の思いを捉える。 ・「立石寺」の「閑かさ」を想像させ、推敲中の句と完成作を比較し、句にこめられた芭蕉の思いをつかむ。 ・「平泉」「立石寺」の俳句の観点をまとめる。				・現代語訳や脚注を活用して歴史的背景に注意して読み、旅や人生、自然などについて自分の意見をもって いる。	
7	整理・分析 ・体験学習で培ってきたふるさと作木の自然や名所などについて、観点に沿って自分の思いを文章と俳句で表現する。 ・文章は、その場を訪れた時に目にした物や感じたこと等を書かせる。		◎		・文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見をもつことができる。〔思判表〕Cエ ・これまでの体験学習、行事を振り返っている。 ・芭蕉の紀行文・俳句を参考にして、作木の自然や名所・伝統文化などを題材に、観点に沿って文章と俳句を作ろうとしている。	観察 記述 発表
8 9	まとめ・表現 ・自分の作品を発表して、観点に沿って交流・推敲し、句集にまとめる。			◎	・進んで芭蕉のものの見方や考え方について考え、観点にそって作品を作り、考えたことを伝え合おうとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕 ・作品を推敲し、句集に仕上げている。	観察 記述 発表

(2) 単元の終末で見取るパフォーマンス評価

パフォーマンス課題		評価基準	
「ふるさとさくぎの句集」を作る。「おくのほそ道」のように俳句と地の文章とを関連づけて書き、これまで体験学習で培ってきたふるさと作木の自然や人の営みなどを俳句に表現する。	A	「人と自然の対比」、「自然の偉大さ」、「人間の営みのはかなさ」、「悠久の自然にも対峙できる先人の偉大さ」、「自然との一体感」などの観点を用い、ふるさとさくぎの人間、人生、社会、自然などについて、俳句と文章で表現することができる。	
	B	ふるさとさくぎの人間、人生、社会、自然などについて、俳句と文章で表現することができる。	
	C	「B」に達していない。	

4 本時の学習

(1) 本時の目標

歴史的背景などに注意して、「平泉」に込められた芭蕉のものの見方や考え方をまとめることができる

(2) 本時の評価規準

○文章に表れているものの見方や考え方について考えることができている。

〔思考力・判断力・表現力〕C読むことイ

(3) 本時のめざす生徒の姿 (評価基準)

評価基準		生徒の姿	基準達成のための手立て
A	文章に表れているものの見方や考え方について考えることができる。	自然の悠久さや時の流れの無常さに比べて、人間の営みのはかなさに涙する芭蕉のものの見方や心情を、他作品や他資料も使って読み取っている。	
B	「B」を満たしている。	自然の悠久さや時の流れの無常さに比べて、人間の営みのはかなさに涙する芭蕉のものの見方や心情を読み取っている。	
C	「B」を満たしていない。	「B」を満たしていない。	芭蕉が目にしたものを読み取り、想像していることを考えさせ、芭蕉の思いを想像させる。 時代背景のわかるものや他作品、現代語訳やリンク先などを、資料として配布する。

(4) 準備物

芭蕉の俳句地図 (高館など記載があるもの)、便覧、現代語訳、「義経記」漫画資料 (クラスルーム)、作木町全体地図

(5) 学習の展開

学習活動	指導上の留意事項 (◇) (◆「努力を要する」状況と判断した生徒への手立て)	評価規準 【観点】 (評価方法)
【既習事項の確認】 1 前時の学習内容を振り返る。 【めあて(学習課題)の提示】 2 本時のめあてを確認する。 3 「平泉」での芭蕉の思いを予想する。 4 本文を音読する。 5 俳句の内容を読み取る 6 「平泉」での芭蕉の思いを想像する。なぜ涙を流したのか。	・芭蕉は「旅」に対してどのような思いを抱いていたか、現代の旅と比較しながら読み取ったことを確認する。 ・句集への道として「昔と今・未来の対比」「変転する人の世」と観点をまとめたことを確認する。 【めあて】「平泉」に込められた芭蕉の思いをまとめよう ・本時は「平泉」の部分の主に前半を読むことを伝える。 発問：芭蕉はなぜ「時の移るまで涙を落とし」たのだろうか。 ◆動機づけではあるが、ここではまださらっと進める。 (予想される生徒の反応) 芭蕉が立ち寄るくらいなので観光名所だろうから、風景があまりに美しくて泣いたのではないかな。 ◇歴史的仮名遣いに注意して、本文を音読する。 ◇「つはものども」とは誰を指すか、「夢の跡」とはどんなところを指すかを、本文と照らし合わせて捉えさせる。 ◆現代語訳を配布する。 ◆奥州藤原三代の栄華と滅亡、義経の哀れな末路などを紹介する。 ◆現代語訳、「義経記」、便覧等を参考にする。 ◆書かれている言葉に注目した記述や発言を褒める。そうすることでただの想像、言い合いになるのを防ぐ。	

〔 個人思考 〕 涙を流した理由を読み取るために(◆1～5 は必要に応じて) ① 芭蕉が目にしたものを捉える。 ② 芭蕉が想像していることは何か。 ③ 芭蕉の思いを想像する。	◆1 芭蕉は今どこにいて、どんな風景を目にしているか。 ・高館にいる。 ・北上川や衣川などが見える。 ・義経がいた館があったとされる高館にまず登ると、辺りの城や館は朽ち果て、ただ草が生い茂っている。 ◇現代語訳から正確に読み取らせ、対応する部分を原文で確認させる。目にしているものは旧跡や草むらや川であることから、予想と相違があることに気づかせる。 ◆2 杜甫「春望」に描かれた風景と「平泉」の風景の共通点は何か。 ・二年で既習の杜甫「春望」を振り返らせ、共通点を考えさせる。 ・国の都が破壊されたが山や河が残っている風景と、平泉の旧跡が田野になっている様子。 ◆3 芭蕉は「平泉」の「旧跡」から何を想像しているか。 ・栄華を極めた藤原氏三代のかつてのありようを偲ぶ。 ・この地に立てこもり、頼朝の命を受けた敵を迎え撃った義経とその家臣たちが奮戦ののちに敗れた様子を想像している。 ◆4 「三代の栄耀一睡のうちにして」とはどういう意味か。 ・奥州藤原三代の栄華も長い歴史から見れば、一睡の夢のようにはないものであるということ。 ◆5 「功名一時の草むらとなる」とはどういう意味か。 ・義経に忠義を尽くした家臣たちは功名を立てたが、それもほんの一時のことで、今はその跡もなく、ただ一面の草むらになっているということ。	
7 芭蕉が涙を落としている理由について考えたことをクラス交流する。	(予想される生徒の反応) ・激しい戦いの場だったのに、今ではまるで何もなかったかのように草むらになっていることに対する虚しさから涙を流した。 ・この地で戦った義経やその家臣の壮絶な最期を想像し、弔いの思いで涙を流した。 ・変わっていく人の世と、変わらない自然とを同時に感じ、感動して涙を流した。	
8 まとめ・振り返り	◇涙した理由をふまえて、「平泉」に込められた芭蕉の思いをまとめる。	
	(めざす生徒の姿・まとめ) ・自然の悠久さや時の流れの無常さに比べて、人間の営みのはかなさに涙する芭蕉の心情を読み取っている。 ・(A) Bに加え、義経記と比べたり参考にしたりして、記述している。 ・(B) どんなに人間が勢力を誇って栄えてもそれは一時のことで、自然の悠久さ偉大さに比べれば、人間の営みははかなくむなしい。まさに杜甫の詩「国破れて山河あり。」のとおりだということに、芭蕉の心は動かされている。「時の移るまで」からその思いの深さが読み取れる。	◎[思判表C読むことイ] 文章に表れているものの見方や考え方について考えることができる。(記述)
9 本時を振り返り、次時の見通しをもつ。	◇俳句や「春望」、便覧、「義経記」などを資料として芭蕉の涙の理由について改めてまとめた上で、後半の「変わらずに残っているもの」として中尊寺金堂での芭蕉の思いを読み取ることを確認する。	

(6) 板書計画

「おくのほそ道」

めあて 「平泉」に込められた芭蕉の思いをまとめよう

★「時の移るまで涙を落としてはべりぬ」
芭蕉はなぜ涙を落としたのだろうか。

夏草や つはものどもが 夢の跡

芭蕉の見たもの（見渡している）

高館 ↓ 田野・北上川・衣川…

← 大門の跡・泰衡らが旧跡・和泉が城…
高館は今は草むら

涙のわけは（生徒発表による）

- ・「国破れて山河あり」
- ・藤原氏三代のかつての栄華 ↑ ↓ 草むら
- ・義経とその家臣たちが奮戦ののちに敗れた様子

★移りゆく人の世

⇕
変わらない自然
悠久の自然